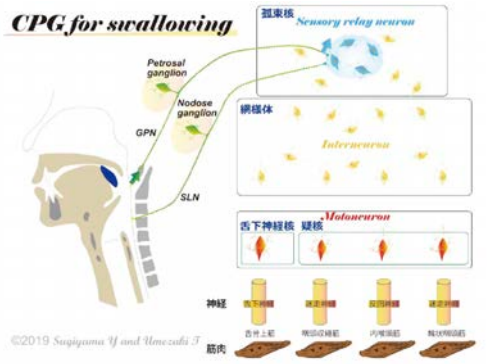
日本嚥下医学会

理事長　梅崎 俊郎

理事長
梅崎 俊郎

Introduction of the Society

現役学生さんや若い先生の中には、耳鼻咽喉科学を特殊感覚器系というくくりで学んだ人が多いのではないでしょうか。嗅覚や聴覚、平衡覚もヒトがヒトらしく生きていくうえでは非常に重要な機能ですが、耳鼻咽喉科・頭頸部外科の守備範囲はafferentの機能だけではありません。発声や嚥下といったefferentの機能も、これまた生命を維持していくうえで必須の機能であり、この嚥下機能とその障害がわれわれの学会の主対象となっています。普段は当たり前のように飲み喰いしている嚥下機能が、突然失われたらどうでしょうか。誤嚥してむせる苦しみが続くことは想像を超えて耐えがたいものがあります。想像さえしたくないのではないでしょうか。

世界の多くの先進国では高齢化が進み、嚥下障害は社会問題化しています。そのため、この20年で嚥下や嚥下障害に取り組む研究者は格段に増加しました。日本嚥下医学会は前身の嚥下研究会を含め創設から約45年が経過しています。その間、嚥下に関わる神経筋の活動の記録解析、嚥下の際の咽頭、頸部食道内の圧の計測、内視鏡での嚥下の観察、X線による嚥下造影検査とその解析など、さまざまな研究がなされてきました。アメリカのDysphagia Research Society (DRS) 創設の10年前に第1回嚥下研究会が開催されているとはいえ、まだまだこの領域は若い学問です。嚥下障害を来たす原疾患は多いにもかかわらず症例ごとに病態が異なり治療方針が画一化されにくいといった性質があります。非常に奥深くやりがいのある分野がまさに、この「嚥下医学」と言えるでしょう。今後ますます増加するであろう嚥下障害や嚥下性肺炎に対して、口から食べる楽しみをさまざまな角度から追及することが何よりも大切です。嚥下のメカニズムの原理原則を理解するとともに、新たな病態の診断法や治療を切り開いていくこと、それこそがこの学会の伝統と創立の精神であり、今後も若い研究者や医療人に受け継がれることを願ってやみません。